

古田史学の会・東海

平成30年

# 東 海 の 古 代

第217号 2018年9月

会長 : 竹内 強      副会長・発行 : 林 伸禧  
編集 : 石田敬一      投稿先アドレス : furutashigaku\_tokai@yahoo.co.jp  
HP : [http://www.geocities.co.jp/furutashigaku\\_tokai](http://www.geocities.co.jp/furutashigaku_tokai)

## 卑彌呼の冢 その5

名古屋市

石田泉城

### 7 高天原

#### (1) 谷江川と天安河

『古事記』には、「坐天安河河上之天石屋」(天安河の河上の天の石屋に座す)とあります。

これまで述べてきたとおり、「天」の領域は、古田武彦説のとおり筑紫・出雲・新羅に直行できる対馬海流圏ですので、「天」の「安河」は、対馬海流圏にあり、高天原もこの「天」の領域にあります。

そして、「天」の原初地については、日本神話で最初に生まれた大八島の中で、別名として「天」が付される島の中にあると考えられます。それらは、億伎之三子島の「天之忍許呂別」、伊伎島の「天比登都柱」、津島の「天之狭手依比売」、大倭豊秋津島の「天御虚空豊秋津根別」の4つの島であり、このうち本国から別れたことを意味する「別」や人格化されている「比売」を除いたところが「天」の原初地であり高天原です。この条件の中で、対馬海流圏の中心にある伊伎島の亦の名は「天比登都柱」であり、大八島の中で唯一別名に「別」も「比売」も付されていない島ですので、伊伎島が「天」の原初地すなわち高天原であると示してきました。

伊伎島が壱岐島であることに異論はありませんので、壱岐が高天原です。

また、壱岐の原の辻遺跡（紀元前3世紀～紀元後4世紀）における出土状況と天照神話のスサノオの悪行に出てくる農地、織布、家畜馬の話は一致しています。こうした遺跡の状況からも、高天原が壱岐であることを支持します。

高天原が壱岐であれば、天安河は、その高天原にある河ですから、天安河は壱岐にある河川と考えます。

したがって、天安河を具体的に位置付けるならば、壱岐に存在して「安」の地名にかかわる「河」です。

さて、壱岐で一番大きな川は、住吉神社を源流とし壱岐の中央を流れる幡鉾川（別名：河内川）で、(一社)長崎県観光連盟 長崎県文化観光国際部観光振興課のウェブサイトによれば、民話で「天の川」の言い伝えが残っています。「天」の原初地である壱岐でいちばん大きな川ですから「天の川」ということでしょう。ただし幡鉾川には「安」に関わる

地名が存在しないようです。

2 番目に大きな川は、壱岐の北部を流域とする谷江川です。私は、谷江川が天安河であると思います。

現在の谷江川の河川名は安河を想起させるものではありませんが、実は谷江川の流域は古くは「安」にかかわる地名です。

第49代光仁天皇の宝亀三年(772年)に壱岐島に壱岐郡・石田郡がつくられ、このうち壱岐郡には風早、可須、那賀、田河、鯨伏、潮安、伊宅の7郷が定められています。この7郷のうち注目すべきは潮安郷です。潮安郷は、谷江川の中流域とおおむね東側、芦辺地区をカバーする旧地名です。その潮安の名称がつけられた元には「安」の地名があると考えられ、古代には谷江川が安河と呼ばれていた可能性を示唆します。

奈良時代の壱岐における郷の配置想定図



また、谷江川の河口には芦辺漁港があり、その河口の南側、芦辺町<sup>やすどまり</sup>芦辺浦<sup>しおやす</sup>の小字に昭和時代まで「安泊」がありました。先に示したように河口の北側は旧くは潮安郷であり、河口の北も南も「安」にかかわる地名ですから、谷江川の河口の辺りは「安」の地名と関連があるといえるでしょう。

さらに、壱岐には多くの城が鎌倉時代のころに築かれていますが、谷江川の中流域にあたる芦辺町箱崎<sup>たいそうふれ</sup>に築かれた城の名は「安城」であり、やはり、壱岐北東部に「安」の地域名があったことは間違いのないようです。

「安」が谷江川に関連する地域名であるとするならば、谷江川は、古代に「安」の地域

にある河ということで「安河」と呼ばれていたとしてもおかしくありません。

谷江川は、玄武岩の溶岩台地の上を流れ、後川川・黒越川・初尾川等の支流が「新城田原」のあたりで合流し、主流は南東へ向かって流下しています。上流にはダムができていますが溶岩台地を流れる谷江川の流れは古代からさほど変わっていないと思われます。

壱岐市役所 谷江川水源の森ガイドマップより



天安河と思われる谷江川の支流のうち、いちばん東にある黒越川上流には、男岳と女岳があり、男岳には男嶽神社があり、女岳には女嶽神社があります。それぞれの神社には磐座と思われるご神体があり信仰の古さを感じさせます。

また、谷江川の本流の最上流域、国道382号線の近くには、縄文時代草創期の前神田遺跡（勝本町新城西触字平川）があります。ここからは、細石刃核、縄文土器や石鏃が出土しており、この谷江川上流域の辺りには、縄文の時代、すでに人が住んでいたことが明らかです。細石刃核は細石器を作る前のもとなる石塊であり、ここで細石器が作られたのでしょう。複数の細石器を溝に縦に連なるよう挟んだ植刃器は、槍や鉾の先につけ大型動物を捕るために使用されました。

## （２）天安河の河原（天安河邊）

『古事記』神代の「**天安河之河原**」は、『日本書紀』神代の一書に「**天安河邊**」とあります。「**邊**」は、「① ほとり。あたり。② 海辺。海の岸に近い所。」です。この天安河邊について「**是爲天安河邊所在五百箇磐石也**」と記述され、天安河の河原を特徴づけます。

「五百箇」とは数の多いことを表す語句で、「磐石」は大きな岩を指しますから「天安河の河原は多数の大きな岩が在るところ」であり、天安河の河原には多くの大岩があります。

実は谷江川の河口付近には、大きな石や、石とかかわる地名があり、現在も谷江川の河原・海辺には多くの大石・岩があります。

## 芦辺漁港周辺（谷江川と大石・清石）



谷江川の河口の南には、芦辺町諸吉**大石触**という地名があります。諸吉**大石触**は諸々が吉兆の大石を意味する地名でしょう。そして、河口の突端付近には大石神社があります。諸吉大石触の諸吉の地名は、明治時代初期までの諸吉村に由来し、その村に大石触がありました。「触」は、<sup>くよしはま</sup> 壱岐独自の呼び名で、概ね村や字の大きさを表す区域です。

また、この河口の南側に清石浜海水浴場があります。清石浜は、その名にあるとおり、清らかな石の浜です。とりわけ、この清石浜は、砂浜ではなく石浜であるところに留意したいと思います。現在は、海水浴場になっているため石は隅に追いやられていますが、石浜の名残があります。また、河口の北側の芦辺漁港の辺りは、近代的に整備されており、多数の大岩がある面影はありませんが、漁港として整備されていない谷江川の河口の北、少式公園の浜の辺りは、石の浜の自然の姿が残されています。

## 谷江川の河口の北、少式公園の浜



河口突端の少貳公園のさらに先には、日本で唯一の龍蛇神神社（常陸国出雲大社に龍蛇神社）があります。この龍蛇神は、出雲大社の神在祭が始まる前に八百万の神を迎え、ここから先導していくという言い伝えがあります。いわば龍蛇神神社は神々の集合場所で、龍蛇神は引率者です。ここも壱岐の基岩である玄武岩が露出し大岩による景観を形成しています。

神が集まるという言い伝えに基づくと、八百万の神が集まって相談した岩戸隠れの神話にかかる舞台は、ここではないだろうかと思像します。谷江川の河口にある龍蛇神神社の辺りは、天安河の河原（天安河邊）として相応しいと思います。

### 龍蛇神神社



龍蛇神神社の南には浪切不動尊があり、地元では「瀬戸立神瀬」と呼ばれています。瀬戸浦にたつ神の瀬です。浪切不動尊そのものも大岩の上に立っています。なお、壱岐の西海岸の渡良にも神瀬があります。

### 浪切不動尊



また、谷江川下流に見られる地層は、玄武岩を基盤として約2500万年前に堆積した砂岩、頁岩、凝灰石から成っています。特に頁岩は堆積面に沿って薄く層状に割れやすい性質が

あり、これらが剥がれ落ちて谷江川河口、竜神岬の北の浜には、石の多い特異な景観が形成されています。

### 竜神岬の北の浜



いずれにしても「天」の原初地の壱岐にあって古くは安河と呼ばれたと思われる谷江川の河口付近は、多数の大石や神が集まる伝承がある地域ですので、『古事記』神代の「天安河之河原」、『日本書紀』神代の「天安河邊」は、壱岐の谷江川の河口付近、龍蛇神社周辺であろうと考えます。

### （３）天金山之鐵（天香山之金）

『古事記』に「**取天金山之鐵而、求鍛人天津麻羅而【麻羅二字以音】、科伊斯許理度賣命【自伊下六字以音】、令作鏡**」（**天金山の鉄を取りて、鍛人の天津の麻羅而を求め、伊斯許理度賣命に科して作鏡を令する**）とあります。「鐵」の新字体は「鉄」です。

また、『日本書紀』には「**以石凝姥爲冶工、採天香山之金、以作日矛**」（**石凝姥を以て冶工師と爲し天の香山の金を採らせ日矛を作らせた**）とあります。

天照大神の弟にあたる天糠戸の子、石凝姥（伊斯許理度賣命）は、天の香山の金属を原料にして日矛を鑄造します。この日矛について、通説では『古事記』の記述を重視して鏡とされ、これが八咫鏡であって三種の神器の一つとされます。金属器製造の始まる時代です。

天照大神は、この鏡に映った自らの姿に興味をもって岩屋戸から出てくるとされます。しかし、『古事記』の記述では、鉄を取って鏡にしますから、その鏡は「鉄鏡」です。これに対して八咫鏡は平原遺跡出土の大型の内行花文八葉鏡と推察されており、「銅鏡」とされますので基本的なところで矛盾が生じます。

一方、『日本書紀』の記述を重視すれば、鉄で作られたものは「鉄矛」です。石凝姥の名からすれば「石で叩きかためる老女」でしょうから、石凝姥は鉄を鍛える鍛冶職人と思われ、鉄器である矛のほうが相応しいように思います。

古代の鏡と矛の出土状況は次のとおりです。

弥生時代の鉄鏡については、ダンワラ古墳（大分県日田市日高）の出土と推定される金銀錯嵌珠龍文鉄鏡を始め数例で、かつ舶載鏡（中国鏡）のみです。つまり、弥生時代の中国鏡は、ほぼ銅鏡と考えて間違いありません。また、仿製鏡（国内鏡）については中国鏡を模倣した銅鏡のみです。したがって、天照大神に差し出した鏡は、鉄鏡ではなく、銅鏡であると考えて間違いないでしょう。しかも、弥生時代の銅鏡の分布の中心は、北部九州にあり、天照大神が岩屋戸から覗いて合い対した鏡は、壱岐を含む北部九州の銅鏡である可能性が高いことになります。

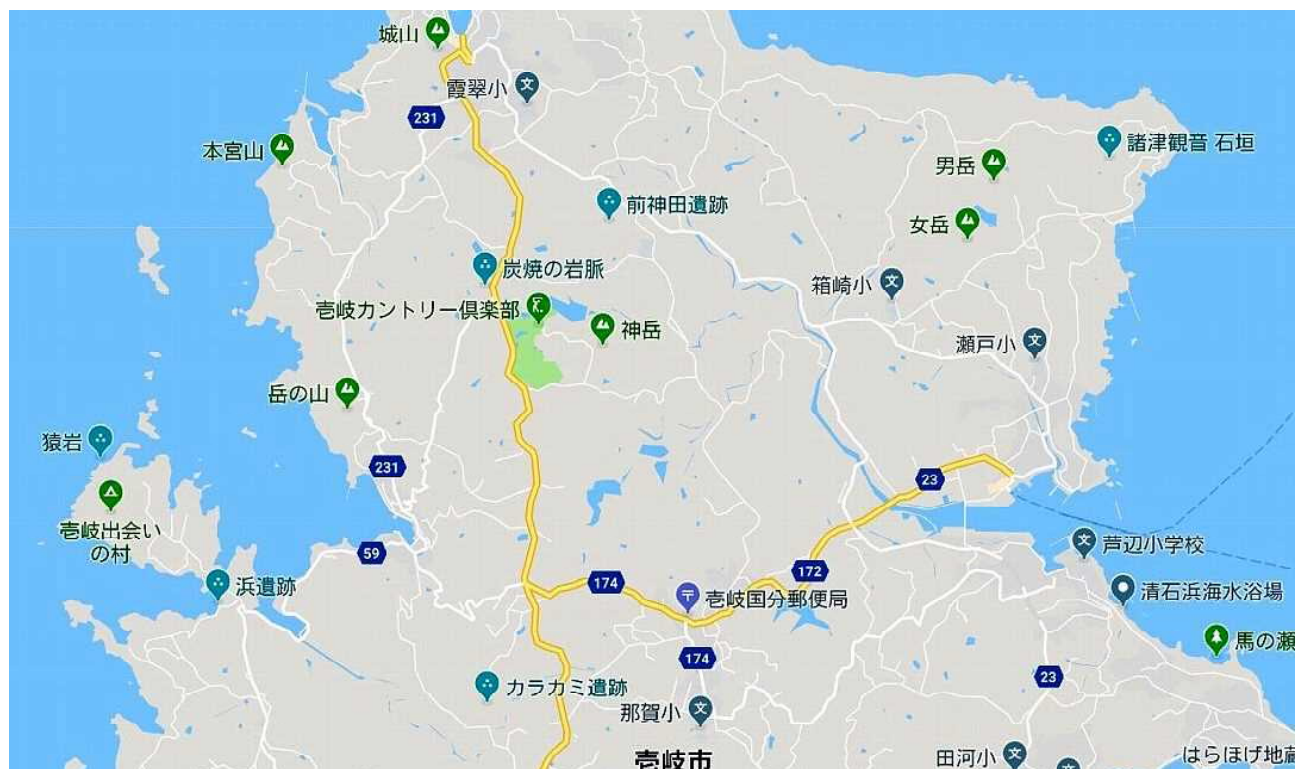
また、天照神話の「天金山之鐵（天香山之金）」から得た鉄で作られた「日矛」は、言うまでもなく鉄矛であり、弥生時代の鉄矛については、福岡、長崎、佐賀のみから出土していることから、「天金山之鐵（天香山之金）」は、壱岐を含む北部九州に限定されます。

私は、記紀の記述と出土状況の両面から考えて、天金山や天香山から得た鉄を用いて、石凝姥が作ったものは、鏡ではなく矛であり、高天原である壱岐における「鉄矛」であると思います。

さて、日本では6世紀後半ごろ、出雲で鉄の精錬が始まったとされています。

紀元前3世紀から紀元後4世紀ごろにかけて形成されたとする原の辻遺跡からは鍛冶関連遺物は未発見ですが、焼土やカーボンが堆積した土杭は発見されています。複数の鉄片や叩き石があるので鉄器生産は行われていたと想定されます。原の辻遺跡からは鉄矛が出土しており大いに注目されます。

#### 壱岐の北部の遺跡など



また、紀元後1世紀から3世紀とされる壱岐のカラカミ遺跡（勝本町大字立石字東触）から7基の周堤付の地上式製鉄炉が出土しています。周辺からは、塊状や棒状の鉄素材や製錬滓、加工途中の矢尻、フイゴの羽口（送風管）、鉄成分が付いた、たたき石、砥石、などを出土しているほか、鉄生産の燃料となる木炭の堆積が確認されています。

ところで、純鉄の融点は1538℃であり、炭素を含有した銑鉄でも1200℃程度が融点ですが、実は鉄鉱石を金属鉄にするのに必要な温度が400～800℃程度の低温還元の方法があります。この温度は弥生土器の焼成温度と同程度です。密閉した窯で木炭と鉄鉱石を燃焼させ窯の中の空気を一酸化炭素で充満させると、この一酸化炭素が酸化鉄の酸素と結合して固体のまま還元され多数の孔のある「海綿鉄」になります。

この「海綿鉄」は不純物を含んでいるので赤熱のまま打ち叩いて不純物を取り除けば鉄が得られます。つまり、温度が低くても鉄鉱石から銑鉄（鉄鉱石を還元した粗製の鉄）を取り出すことができるのです。

一般的には、このカラカミ遺跡の製鉄は、銑鉄を製鉄原料として脱炭し不純物を取り除いた質の高い鉄素材にするほかに鉄製品を製造していたと考えられています。しかし、出土状況や低温還元の技術からすると、鍛造・鍛接や炭素量調整などの鍛冶技術のみならず、少なくとも低温で鉄鉱石から鉄を取り出す精錬技術を有していたと考えられます。

壱岐は、カラカミで加工した最先端の鉄製品や高品質の鉄素材の入手先として、国内各地から注目される存在だったでしょう。

なお、製錬滓は鉄分に含まれる不純物で製錬時に高温で熔融した時に排出されるスラグです。鉄材を溶かす程の炉温があったことを示唆しています。

また、鉄を高温で熔融し還元する際に必要な石灰岩は、勝本港に石灰岩層が露出しており、また鉄を接合する鍛接の際に必要な硼酸は、カラカミ遺跡の北にある硼酸食塩泉の「湯の本温泉」があり、製鉄に必要な材料は壱岐内の身近な場所から比較的容易に得られると思われる。

紀元前後は、北部九州において鉄器が普及し石器が消滅する時期です。この時期とカラカミ遺跡の鉄製造の時期は後述のとおりマッチしています。いずれにしても日本最古の製鉄施設が、この壱岐で発見されている点を重要視しないわけにはいきません。

このカラカミ遺跡の製鉄施設は、朝鮮半島南部の紀元前3世紀以降と思われる<sup>メクト</sup>勸島遺跡の製錬炉に似ているとされます。製錬炉とは鉄鉱石を還元することによって鉄を取り出す炉です。この遺跡は朝鮮半島の南の海岸線の真ん中辺りに位置し、釜山から西へ約100kmにある<sup>サジョン</sup>泗川市の中にある小さな島が<sup>メクト</sup>勸島です。鉄製造の技術は秘伝であるため、こうした小さな島で行われ外部にノウハウが漏れないようにしていたと思われます。

この<sup>メクト</sup>勸島から福岡県の須玖岡本遺跡から出てくる土器と同じ須玖式土器が大量に出土しています。<sup>メクト</sup>勸島は、後々のことになりますが、倭人が占有していた任那と呼ばれる場所に位置します。

また、釜山から東へ50kmの海岸に面した蔚山市内の<sup>ウルサン</sup>蔚山達川遺跡は、鉄鉱石の鉱山の遺跡で、鉄鉱石とともに「土鉄」と名づけられた黒褐色土を鉄原料として供給していたと考えられます。ここからも須玖式土器が出土しています。<sup>ウルサンタルチョン</sup>蔚山は、後々に始祖に倭人が関係する新羅にあります。

したがって、朝鮮半島南部の沿岸部に住んでいた人々と壱岐、そして、北九州に住んでいた人々は交流していただけでなく、文化・技術を共有していた同一の民族、すなわち倭人が住み、鉄を取って製錬・加工していたと考えられます。

そして、弥生時代中期の遺跡としては、須玖岡本遺跡の西に近接する赤井手遺跡（春日市弥生7丁目）があります。鉄素材を加工して鉄器を製作した鍛冶遺跡とされますが、鉄素材、鏃、鉄斧等の製品や未完成品、銅鐸の<sup>ようはん</sup>鋳型（鋳范）、ガラス勾玉の鋳型、さらには熔融した形跡のある鉄片などが出土しています。青銅器の鋳造経験や、溶融点1,300℃のガラス鋳型の出土を考えると、赤井手遺跡では、鉄精錬が可能な高温が確実に得られるようになったことを窺わせます。

### 弥生時代の鉄関連の遺跡



ウルサンタルチョン

ヌクト

つまり、倭人は、蔚山達川の鉱山で鉄鉱石を取り、これを原料に、朝鮮半島では靑島を拠点として鉄を製錬するほか鉄器等を供給し、壱岐では、カラカミを拠点として鉄の製錬と鉄製品の製造を行い九州などに供給していたと考えられます。その後、弥生時代中期には、そうした技術が九州本島に渡り、赤井手遺跡においても精錬が行われるようになります。弥生時代において、朝鮮半島南部から壱岐や北部九州で共通の須玖式土器、鉄関連施設や鍛冶・製錬技術を有していたことから、倭は海峡国家であるとの古田武彦説が、ここでも裏付けられます。『魏志』倭人伝の3世紀や『宋書』の5世紀のみならず、それ以前の紀元前においても倭人は朝鮮半島と九州に跨がって住んでいたことになります。

さて、カラカミ遺跡（勝本町立石東触）には、標高約88mの唐神山があります。その唐神山を中心にして、南斜面からは弥生中期とされる鉄器、土器、石器、銅鏃、鏡片が出土し、その貝層からは鯨骨製銚、イルカ頭骨、さらには鹿のト骨(ぼっこつ)片などがみつかっています。ト骨片は、ここで占いがなされていた証拠であり、『古事記』の記述「**内拔天香山之眞男鹿之骨抜而**」(天のかやまの まおしかのほねぬきを うちぬきて)にあるとおり、雄鹿の骨に穴を開けて占なう記事とぴったり一致し、天の香山が唐神山であることを支持します。北斜面からは弥生後期の鉄器、土器、石器、銅鏃、完形の漢式土器などを出土しているとされます。しかし、漢式土器が出土していることからすると北斜面の遺構は弥生後期であるのは疑問です。弥生中期前半の可能性があると思われます。

南斜面、北斜面ともに、多量の叩き石とガラス状の光沢がある砥石が出土しており、これらは鉄製品の加工や研磨に使われた道具と考えられます。

この唐神山の山頂には小さな祠のある香良加美神社があり、「香良加美神社」と刻まれた石の祠の地下から石剣が出土しています。この唐神山は、日本で最古の鉄の精錬・加工施設を有するカラカミ遺跡の中心にあります。この唐神の正体は、まさに加羅に位置する

サジョン <sup>メクト</sup> 泗川市の<sup>メクト</sup>勅島において鉄製錬の知識・技術を培った技術者ではないかと考えられます。香良加美は加羅の鉄の専門家を指すと思います。百嶋神社考古学で言うところの新羅の王である倭人の昔氏とヘブライの血を引く瀛氏の金山彦の両方の血を引く、いわば混血の倭人でしょう。倭人は鉄を求めて大海を渡り朝鮮半島へ行ったという考え方が優勢ですが、倭人はもともと朝鮮半島に住んでいたと考えるべきだと思います。須玖式土器など共通の文化を持った倭人であるからこそ<sup>メクト</sup>勑島と<sup>メクト</sup>壱岐島において秘伝の製錬技術を共有できたものと思います。

したがって『古事記』の「天」の「金山」、『日本書紀』の「天」の「香山」は、「天」の領域にある壱岐の「香良」の神を祀る山、すなわち「香良山」であろうと思います。記紀は鉄の先進地であるカラカミ遺跡を象徴する「香良山」をそれぞれ「金山」「香山」と記したと思います。

天照大神と関連があると考えられるカラカミ遺跡の時代推定は、土器片によって、紀元後1世紀～3世紀とされています。しかし、これは畿内の土器製作が最も進んでいたという前提での土器編年で推定されています。

カラカミ遺跡からは、紀元前2～1世紀ごろの須玖式土器が出土しており、この土器は、北部九州から畿内に伝わったと考えた方が妥当と思われ、カラカミ遺跡は紀元前2世紀ごろからの遺跡であることを示唆しています。また、弥生前期後半の紀元前3世紀中頃から紀元前2世紀初め頃の板付II式甕や、須玖式土器よりも早期の弥生中期初頭である城ノ越式土器も出土しています。したがって、カラカミ遺跡は通説の紀元後1～3世紀の遺跡とするのは疑問です。

須玖式土器が多量に出土する<sup>メクト</sup>勑島遺跡は、紀元前3世紀～紀元後3世紀とされ、また、鉄鉾山の<sup>フルサントルチオン</sup>蔚山達川遺跡は、紀元前2世紀頃の遺跡とされますので、これらの時期も踏まえると、カラカミ遺跡は、紀元前2世紀頃からの遺跡と考えるべきではないかと思えます。

したがって、カラカミ遺跡は、紀元前2世紀から紀元後3世紀までの頃に栄えたと思われるが、天照神話については、石器が利用されるとともに金属器が作られる時代のこととして語られますので、紀元前後の伝承ではないかと思われます。

#### (4) 天堅石

『古事記』には、「取<sup>メクト</sup>天安河之河上之天堅石」(<sup>メクト</sup>天安河の河上の天堅石を取りて)とあり、天安河の河上では、天堅石すなわち硬い石が取れるとあります。

「天堅石」は、現在の谷江川の支流で、勝本地区を流れる後川川の上流にある「炭焼の岩脈」ではないかと思えます。「炭焼の岩脈」は、谷江川の川上、すなわち天安河の河上にあります。黒っぽい玄武岩の隙間に白っぽい流紋岩が貫通している岩脈が露出し、柱状節理にそって岩が裂けて剥がれ落ちています。流紋岩はきめが細かく、石英の堅い粒を含み砥石として使われます。保水性があるので水なしで研ぐことができます。炭焼き用の樹木を切る刃物の研磨に使われたので「炭焼の岩脈」と呼ばれるのかもしれませんが。

カラカミ遺跡では、多量の叩き石(主に安山岩)と砥石(主に砂岩、頁岩)が出土しており、これは鉄製品の加工・研磨に利用された道具と考えられます。また、研磨による美しい光沢を有する石の種類は特定されていませんが、これが流紋岩かもしれません。

これらの石器は、まさに天の堅石であって、これで鉄製品の製造などを行ったと考えます。そして、天照神話に石が話題に挙げられているのは、まだ石器が重要なアイテムであった時代のことであるからだと思います。紀元前後は、北部九州において鉄器が普及し石器が消滅する時期です。

したがって、このことから天照神話が紀元前後の伝承であったことを示唆しているようです。

# 諏訪地方の古代

一宮市 畑田 寿一

諏訪地方は諏訪湖の周辺に縄文時代草期から人々が住み着き、諏訪大社を中心とした独自の文化を育んできた。この地方の特徴として縄文時代から古墳時代までの期間、同じ遺跡が継続することで、諏訪湖の南東に位置する一時坂遺跡では縄文初期から平安時代までの営みをみることができる（諏訪市一時坂遺跡発掘調査報告書（1988）諏訪市教育委員会）。通説では弥生人が縄文人の土地を乗っ取り弥生文化が花咲いたとされているが、この地では縄文文化が徐々に弥生文化を吸収していく様が観測でき興味深い。今回はその様子を探ってみたい。

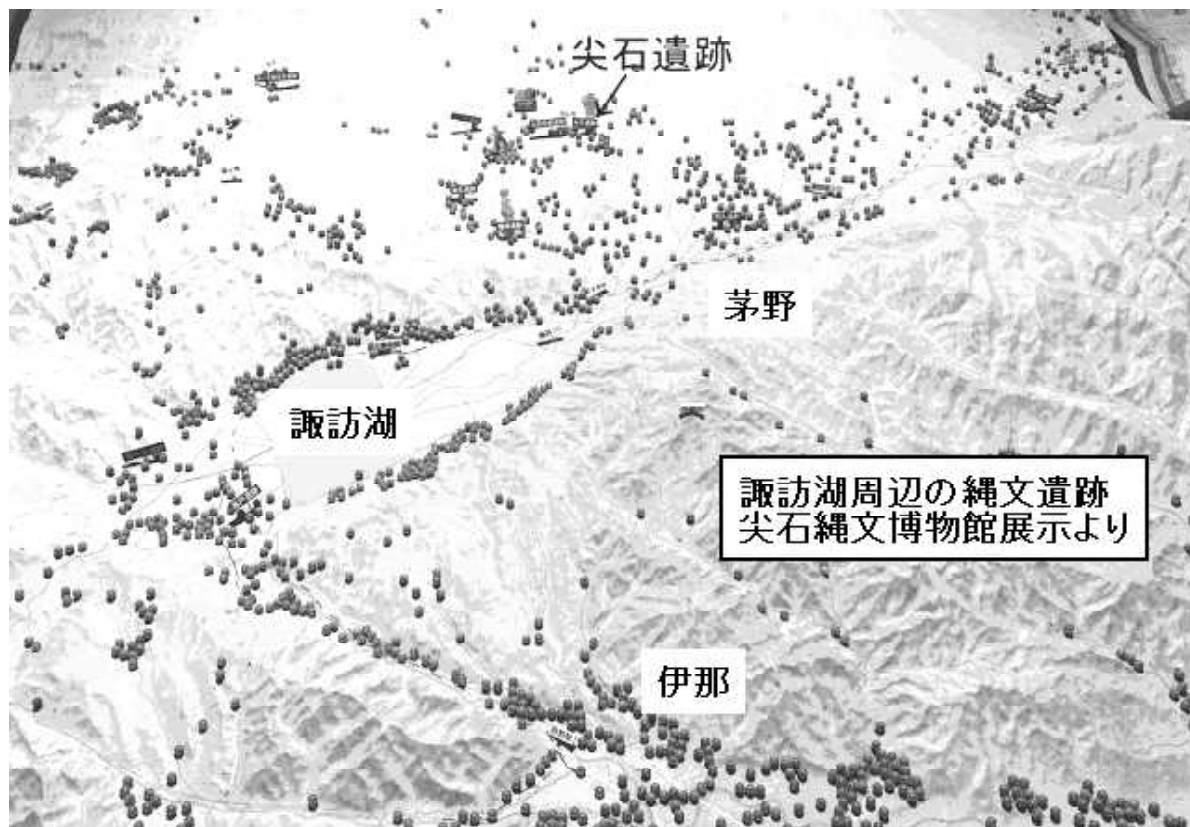
## 1 諏訪市史からみる諏訪地方の古代

諏訪地方の歴史を纏めた資料は諏訪大社を中心に多数存在するが、全体を俯瞰した資料は少ない。その中で平成7年に発刊された諏訪市史は今まで発掘された多数の遺跡をもとに体系的に纏められており大変有意義な資料である。この資料に教示を受けながら縄文中期から6世紀までの3500年間を概観すると、おおよそ次の経緯を辿ったと思われる。

### ① 約5千年前～4千年前（縄文時代中期）

諏訪地方での縄文集落は1万2千年～1万年前（縄文草期）から始まるが、縄文時代中期には人口が増加して最盛期を迎える。繁栄の要因は黒曜石の採取によるものと考えられており、全国の縄文遺跡の1割に達するとする試算もある。

#### < 諏訪地方の縄文遺跡分布 >



これだけの人口を養うには狩猟だけでは不可能で、地元出身の藤森栄一氏は昭和23年に「縄文農耕説」を発表したが学会からの激しい批判に晒された。その後、昭和49年に荒神山遺跡の縄文土器からエゴマが見つかり状況は沈静化したが、学会は「農耕は補助手段」との見解を変えていない。しかし、黒曜石の加工により生計を立てていた集団が存在することは容易に想像でき、広範囲な流通経済が成立していたと考えるべきであろう。

## ② 約4千年前～3千年前（縄文時代後期）

寒冷化に伴い人口の減少が始まる。耕作に適した土地が元来少ない上に高地であったことから食料難に陥ったと考えられる。この頃から宗教色が濃くなり呪術的な道具が沢山作られるようになる。

## ③ 約3千年前～2千3百年前（縄文時代晩期）

集落はさらに少なくなり諏訪市域ではほとんど見られなくなる。終末期には茅野市の御社宮司遺跡から稲粃の跡が付いた縄文土器からみられることから稲作が始まったと考えられるが、部分的であり西日本に比べて少し遅れて伝わった。

## ④ 紀元前2世紀～紀元1世紀（弥生時代中期）

天竜川沿いに稲作が普及してきたが、寒冷地であることから本格的な普及には至らなかった。土器は弥生式の特徴を備えたものが登場し、死者を埋葬後再度掘り起こして火葬し土器に詰める埋葬方法（再葬墓）もみられるようになる。また、一時坂遺跡などでは集落が再登場し、人口の増加が見られる。

## ⑤ 紀元1世紀～紀元3世紀（弥生時代後期）

稲作が本格化し、50軒以上の大集落も見られるようになる。

天竜川流域では首長の墓と考えられる周溝墓が多数出現するが、諏訪地方ではほとんど見られない。

土器は独自の岡谷市橋原遺跡の橋原式土器が登場し、「諏訪国」の母胎となった。稲の刈取り用具として磨石包丁が出土することから、石器文化も健在であったと考えられる。橋原遺跡からは「槍かんな」など8点の鉄器が出土し鉄器の使用の始まりを感じさせる。ただし、<sup>やじり</sup>鍬はほとんど黒曜石で未だ鉄器は使われていない。（橋原遺跡発掘調査報告書（1981）岡谷市教育委員会）

## ⑥ 紀元4世紀～紀元7世紀（古墳時代）

4世紀ごろからは千曲市（長野市近郊）では森将軍塚（100m）など大規模な前方後円墳が出現するが、諏訪地方では円形や方形の周溝墓が現れる程度で、前方後円墳の出現は6世紀まで待たなければならない。

鉄器の使用開始時期は不明であるが、フネ古墳からは各種の鉄器が出土していることからこの時期には一般化していたと考えられる。

## 2 諏訪神社と出雲

『先代旧事紀』と『古事記』は国譲りの出来事があった時期に<sup>たてみなかた</sup>建御名方神が諏訪に入ってきたとしているが、諏訪神社は縄文時代から存在した。建御名方神伝説は『日本書紀』では見られないことから信濃安曇氏の南進に関連する事柄と捉えるべきであろう。

しかし、安曇氏の穂高神社とは神殿の造りなどが異なり、6世紀後半に安曇氏以外の九州勢か出雲勢が当地に移って来たのではないか。

諏訪神社は3種類の性格を併せ持っていると考えられる。

### ① 日本古来的な側面

柳田國男氏が主張する「ミシャグジ」で、大和民族と先住民族の境界に建てた塞の神で、諏訪神社では「男性の性器を模した石棒」、「村の境界に植えた樹木」、「磐座」などが該当する。また、この発展形が四隅に柱を立てた祠を意味するとする説もある。いずれにしても日本古来の信仰に起因するものと考えられている。

< ミシャグジ >



### ② ツングース（扶余）的な側面

ツングースが祭祀時に使用する鉄鐸と同形のものが存在する。

鉄鐸は朝鮮半島、九州、瀬戸内、近畿地方の5世紀～7世紀の古墳から出土し、愛知県では春日井市高蔵寺5号墳、田原市藤原1号墳からも出土して決して珍しい物ではない。しかし、長野県では諏訪地方が唯一の出現地で途中の経由地に存在しないことや、現在でも祭祀に使われていることから大陸から直接持ち込まれた可能性は高い。

祭祀の生贄として鹿の首を捧げる風習からツングースとの関連を指摘する説は多いが、同様な説を持つ他の地域と同様に証拠性に欠ける嫌いがある。

< 鉄鐸諏訪大社 >



### ③ 出雲的な側面

「四面に柱を立てて聖域を区画する」、「蛇を神の使いとする」などが挙げられる。しかし、出雲では中心の柱として心柱あるが諏訪神社には無い。むしろ御幣を使った九州の高千穂神社の聖域確保の方が近い可能性もある。

神殿も大社造りでなく、拝殿の方向も西方に統一されていないことから現在も諸説が乱立しており、戸矢学氏は著作「諏訪の神」で物部守屋との関連を重視した説を述べている。

< 高天原神楽 >



鉄器の使用開始は明らかでないが、5世紀のフネ古墳からは刀剣類以外にも農耕具が出土している。尾張地方の朝日遺跡では弥生時代後期（3世紀末）には鉄器の使用が確認されており、50年～100年程度の遅れがあることになる。

須恵器は従来の土師器に比べて高温で焼いた器で、近畿では5世紀前半（古墳時代中期）に、尾張、美濃地方では5世紀後半（古墳時代後期）に生産が開始された。諏訪地方に伝わるのは6世紀に入ってからで伊那ルートで伝達されたと思われる。

傾斜地の関係から縄文時代から弥生時代まで同じ直径 4 m 程度の竪穴式住居であった。弥生時代には倍の大きさの住居も出現するが、10 畳程度が平均的な一家であったと考えられる。当時は大家族主義であったとする説が多いが、この地方では当て嵌まらない。

4世紀の終り頃、円形・方形の周溝墓が現れ、5世紀に入るとフネ古墳（西山地区）や一時坂古墳（上諏訪）が造られるようになる。また、同時期に古墳での祭祀に使われた土器も出土しており、古墳文化の到来を窺わせる時代となった。

6世紀に入ると古墳の構築が本格化し、7世紀に入ると馬具等の副葬品が増えて軍事力を背景とした首長が存在した。この状況は関東の毛野王国からは100年、尾張からは150年程度遅れており、住民の階層化が完成した時期と捉えることが出来る。

2005年、国立科学博物館・国立歴史民俗博物館・読売新聞社の共催で「特別展『縄文VS弥生』ガチンコ対決!!」が企画された。縄文時代の女性が当時の常識を覆して毛皮でなく布を着ていることや、キャッチコピーの斬新さから歴史愛好家の間で話題を呼んだが、特にポスターに採用した弥生時代に扮した朝鮮半島系の女性像を中心に疑問を投げる意見が多く寄せられ、インターネットで検索すれば現在でもその状況の一端を知ることができる。

「この女性は我々の祖先像か?」、「朝鮮半島の人々と我々とのDNAの違いをどの様に説明するのか?」、「なぜ我々は朝鮮語を話さないのか?」、「朝鮮半島の民族の成り立ちは?」など「朝鮮半島から来た弥生人が縄文人を押し退け弥生文化が花開いた」とする説に疑問を投げ掛ける意見がその後多く寄せられ現在に続いている。

## < 縄文VS弥生ポスター >

[illegible]

馬と同様に労役を強いられ、戦時には真っ先に兵士として徴発される。

しかし、彼らが日本列島にたどり着けば、持っている先端技術により厚遇され、温暖な気候の下、優しい日本人の妻を娶り、戦争の無い日々が送れる。日本列島は真に「日の本の地」、「蓬萊の島」であった。

前記の2つの国立研究機関は大きなミスリードを犯していないか。

諏訪地方は縄文時代中期には繁栄を極めていたが、気候の寒冷化に伴い居住可能な人口が限られるようになるとともに、日本海と関東を結ぶルートも長野市南の千曲市から碓氷峠を経て高崎市へいく道が重要視されるにより、諏訪地方は各入り口を峠で塞がれている地形から陸の孤島化し、他からの干渉も少なく独自の文化が構築されてきた。弥生時代中期になり気候が温暖化すると再び人口の増加がみられるが、古来からの信仰を継続しており、弥生人の外部からの侵入説は当たらない。「従来からの住人が弥生文化を吸収しつつ発展していった。」と考えるべきである。

文化の吸収は尾張・三河地方から見ると百年程度遅れて伝わっていると考えられる。しかし、生活は質素でも祭りは活発に行われ、活気のある生活を送っていた。人間にとって何が幸せかを問う地域であったと思われる。

## 「<sup>たんわら</sup>舩牟羅国」の所在地（1）

瀬戸市 林 伸禧

### 1 はじめに

「東京古田会ニュース」180号（平成30年5月）に西村秀巳氏が本会会員の石田敬一氏による論考「『隋書』の「舩牟羅國」について」で『隋書』に掲載されている「舩牟羅國」は「済州島」であるとの考えに関して、次のとおり論評している。

- ①「舩」は「耽」の異体字ではなく置き換えである。
- ②『三国史記』の「耽羅即耽牟羅」は分注記入者の考えで、金富軾は「耽牟羅」と「耽羅」を別の國と考えている。
- ③前項（①、②）により「舩牟羅國」は済州島ではない。ただし「耽羅」は『三国史記』に8回登場し、その全てを「済州島」と考えて矛盾はない。
- ④今のところ「舩牟羅國」を「台湾」と考えている。
- ⑤「古田史学の会」において、「舩牟羅國」がボルネオ島でないかと話題になったことはない。

筆者は、「舩牟羅國」は「済州島」であると考えているので、筆者の論証を述べて会員諸氏のご意見を賜りたい。

### 2 『隋書』での「舩牟羅國」掲載文

#### (1) 『隋書』列伝・東夷（百済条）

平陳之歳，有一戰船漂至海東舩牟羅國，其船得還，經於百濟，昌資送之甚厚，並遣使奉表賀平陳。

高祖善之，下詔曰：「……」使者舞蹈而去。

……

其南海行三月，有舩牟羅國，南北千餘里，東西數百里，土多麋鹿，附庸於百濟。

（中華書局版 百納本二十四史『隋書』1819・1820頁）

## (2) 概要

前段：高祖が陳國を平定した時、一隻の戦船が漂流して「舩牟羅國」に漂着した。百濟の便宜により帰国できたことについて、高祖が感謝したと記述している。

①皇祖が陳國を平定したときの戦いで、一隻の戦船が漂流して海東の「舩牟羅國」に漂着した。

②この戦船は、百濟王昌から多大の便宜を図ってもらい、百濟經由で帰国した。

③百濟王昌は同時に使者を派遣して陳國平定を祝賀した。

④高祖は、これを喜び、次のような詔「……」を述べたところ、使者は喜び踊りながら退出した。

後段：戦船が漂着した「舩牟羅國」の概要を次のように述べている。

①南へ海行「三月」のところにある。

②島の大きさは、「南北千餘里，東西數百里」である。

③島内には「麋鹿」が棲息している。

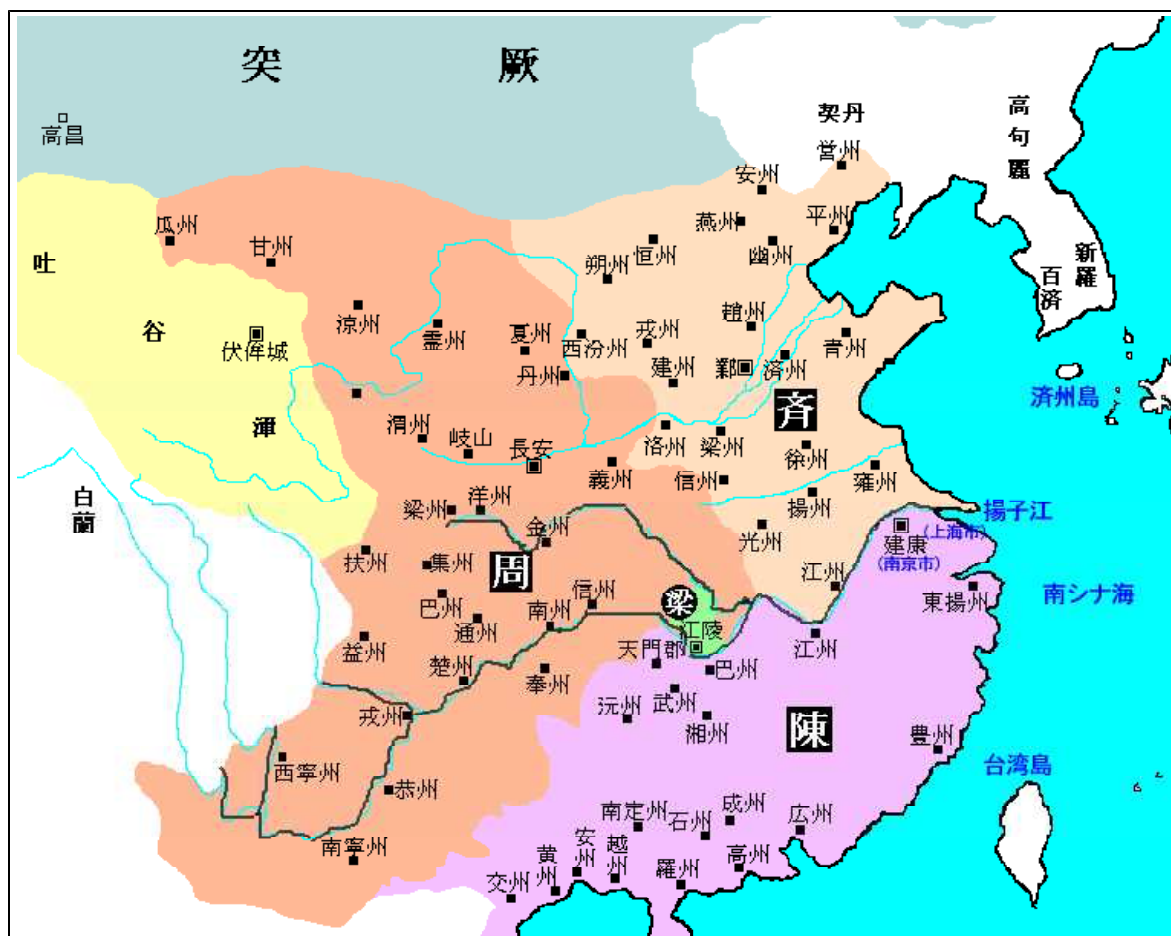
④百濟の属国である。

## 3 隋が南朝の陳を平定した直前の状況

### (1) 中国の南北朝の晩年期における状況

北朝では「北周、北梁」、南朝では「後梁、陳」があり、その区域は図のとおりである。

中国南北朝晩年期の状況



※1 Wikipedia南北朝時代 (中国)より転記。(※濟州島・揚子江・台湾島・東シナ海を追記)  
([https://ja.wikipedia.org/wiki/南北朝時代\\_\(中国\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/南北朝時代_(中国)))

## (2) 隋による中国統一経過

- ① 北周は北齊を滅ぼし（577年）、華北を統一した。
- ② 楊堅（隋・高祖）は北周から禪譲を受けて、隋を建国（581年）した。  
長安を大興城と改めて首都とした。
- ③ 隋は、南朝・後梁を滅ぼした（587年）。
- ④ 隋は、南朝・陳を平定（589年）して、中国を統一した。

## 4 地理的状況

### (1) 南北朝時代の地勢

- ① 隋と陳との国境線は揚子江である。
- ② 陳の都である建康（現、南京市）は長江の南岸河口付近である。

### (2) 海流

中国東側の海域（東シナ海）の海流「黒潮」は北上しており、黒潮の一部は分流して、九州西方沖から対馬海峡を通過して日本海に流入しており、対馬海流と呼ばれている。なお、中国沿岸には南下する海流として中国沿岸流が存在する。

## 5 筆者の見解

### (1) 「舩牟羅國」は済州島である。

- ① 揚子江付近で漂流すると、東シナ海の海流に乗って北進する。
- ② すなわち、『隋書』百濟伝での戦船は海流に乗って漂流し、中国海東の舩牟羅國（済州島）に漂着したものと思われる。  
もし、中国沿岸流に乗った場合は、南下して中国の沿岸に漂着すると思われる。

### (2) 西村氏の「舩牟羅國は台湾」説について

台湾は、揚子江より南方に位置する。台湾海峡は幅150km<sup>\*1</sup>とされ、かつ、中国側に天然の良港が多くあり、島も多数存在するので、台湾よりも沿岸に漂着する可能性が高い。

### (3) ボルネオ島説について

ボルネオ島はシンガポールの東側に位置するので、中国の海東ではない。

## 6 「舩牟羅國」の概要

### (1) 「舩牟羅國」に関する情報

- ① 魏の張政（帯方郡の武官で塞曹掾史）は長期にわたり邪馬壹国に滞在していたので、張政が、朝鮮半島・九州等の状況を本国に報告していた資料をそのまま転記したと推定する。
- ② 魏の時代に用いられた「短里」・「二倍年曆」で記述されたものをそのまま転記したと思われる。

### (2) 「舩牟羅國」の大きさを短里で算出する場合

- ・南北千余里：(70～80m) × 1000 = 70～80km余
- ・東西數百里：(70～80m) × (400～500) = 28～40km
- ・済州島は「最大幅：31km、最大長：73km」<sup>\*2</sup>であるとされているので、済州島と見なしてよいと思われる。

---

\*1 台湾の地理 (<https://ja.wikipedia.org/wiki/台湾の地理>)

\*2 済州島—wikipedia (<https://ja.wikipedia.org/wiki/済州島>)

(3) 「舩牟羅國」の大きさを長里で算出した場合

西村氏は、長里（唐：560m）で算出して「約560km×約280km」としている。

- ・南北千余里：560m×1000＝560km余
- ・東西數百里：560m×500＝280km

台湾の大きさは「南北が約395km×東西が約144km」\*1であるから、西村氏の「舩牟羅國」は台湾に比較してかなり大きい島（南北1.4倍、東西は1.9倍）となり台湾ではあり得ない。

(4) 「東西・南北」については次の論考を参照されたい。

- ・石田敬一著『其国境東西五月行南北三月行』の意味するところ  
（「多元」141号、2017年Sep）」
- ・石田敬一著「古代の『東西』『南北』の概念」  
（「多元」145号、2017年May）」

(5) 「其南海行三月有舩牟羅国」について

百済の都「居拔城」から済州島まで三月行とされているが、二倍年暦では1月半と思われる。但し、どの程度日数を要したかを具体的に掲載している文献を承知していないので、御教示していただければ幸いです。なお、『隋書』倭国伝で記述されている「其国境東西五月行、南北三月行」の「三月行」も1月半と思われるので、倭国伝での三月行を具体的に示す文献があれば参考になると思われる。

(6) 「麋鹿」\*2について

HP「済州観光公社旅行ブログ」の「済州の自然生態体験のスペース、ノロ生態観察園とコチンオルム」（2013年09月29日）には写真と共に次のように掲載されている。

- ・ノロ鹿は、済州を代表する動物です。
- ・済州大学のシンボルと済州を本拠地とするサッカーチームの済州UTDのシンボルマークも鹿です。
- ・鹿は一時、個体数の減少により絶滅寸前まで追い込まれましたが、済州島で保護種に指定し徹底的な管理の元、徐々に個体数が増えてきました。

すなわち、麋鹿は古代から済州島に棲息しており、舩牟羅國が済州島であることを示している。また、台湾\*3には棲息していないようである。

## 『法隆寺伽藍縁起竝流記資材帳』における古代逸年号 — 古代史覚書帳 —

瀬戸市 林 伸禧

### 1 はじめに

『市民の古代』第11集に古代逸年号の資料が掲載されている。そのうち、「大化三年歳次戊申 …… 許世徳陀高臣宣命」の出典文献を把握していなかったが、富川ケイ子氏のご教示により文献が判明し、調査した結果、次のことが把握できたので報告する。

\*1 「MeetTaiwan—台湾の基本情報」—地理環境・地理位置

([https://www.meettaiwan.com/ja\\_JP/menu/M0000753/台湾の概況.html](https://www.meettaiwan.com/ja_JP/menu/M0000753/台湾の概況.html))

\*2 ノロ鹿：<https://ja.wikipedia.org/wiki/ノロジカ>

\*3 ハナシカ（梅花鹿）：[https://www.kagiken.co.jp/new/kojimachi/animal-hanajika\\_large.html](https://www.kagiken.co.jp/new/kojimachi/animal-hanajika_large.html)

## 2 文献

当該古代逸年号は、『法隆寺伽藍縁起竝流記資材帳』に掲載されている。国立国会図書館のデジタルコレクションの関係記事は、次のとおりである。

### ① 2コマ

奉爲池邊大宮御宇（※用明天皇）

天皇并在坐御世御世

天皇、歳次丁卯、小治田大宮御宇（※推古天皇）

天皇并東宮上官聖徳法王（※聖徳太子）、

法隆學問寺、

并 四天王寺、中宮尼寺、橘尼寺、蜂岳寺、池後尼寺、葛城尼寺〔乎〕、

敬造仕奉、

亦小治田

天皇大化三年歳次戊申九月廿一日己亥 許世徳陀高臣宣命爲而食封三百烟入賜岐

### ② 36コマ

合食封參佰戸

右本記云 又大化三年歳次戊申九月廿一日己亥 許世徳陀高臣宣命納賜 己卯年停止

## 3 掲載逸年号

掲載されている「大化三年歳次戊申九月廿一日己亥」を『日本書紀』と比較したところ、表1のとおりである。

表1 『日本書紀』戊申年の比較表

| 干支年 | 西 暦  | 年 号       | 朔 日   | 日 数     | 備 考 |
|-----|------|-----------|-------|---------|-----|
| 戊申年 | 588年 | 崇峻元年      | 九月丁卯朔 | 己亥（卅三日） |     |
|     | 648年 | 孝徳四年、大化四年 | 九月己卯朔 | 己亥（廿一日） |     |
|     | 708年 | 元明二年、和銅元年 | 九月己未朔 | 己亥（四一日） |     |

※朔日は、『日本書紀暦日原典』（編集：内田正男、雄山閣出版、昭和53年1月）による。

その結果、『法隆寺伽藍縁起竝流記資材帳』と『日本書紀』との「大化」年号に、一年のズレがあることが判明した。

## 4 『小治田』関係記事

「亦小治田

天皇大化三年歳次戊申九月廿一日己亥 許世徳陀高臣宣命爲而食封三百烟入賜岐」

と、「亦小治田」の次は空白となっており、改行して「天皇……」と記述されている。

これについては、筆者は次のように理解している。

### (1) 一文として「小治田天皇大化三年歳次戊申九月廿一日己亥」とした場合

次の疑問が生ずる。

- ・小治田天皇は推古天皇と推定されるので、大化年号と整合がとれない。
- ・「亦小治田」と4字で改行し「天皇大化三年……」と掲載されているのは不審である。

### (2) 見解

- ・「亦小治田」と「天皇大化三年」の間には文言があったと思われる。
- ・それは「孝徳」以外の天皇名であったため削除されたと思われる。

## 5 その他

### (1) 文献について

国立国会図書館以外には「宮内庁書陵部」や「西尾市岩瀬文庫」に古文書として所蔵されている。活字本としては、「大日本仏教全書」117冊に掲載されており、内容は国立国会図書館本と同文であった。

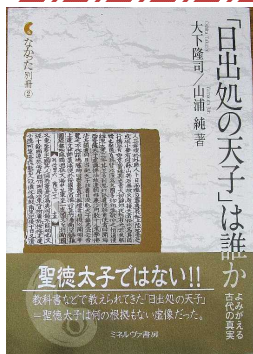
### (2) 一年ズレの文献

一年のズレがある文献が多々存在することが判明しており、それらを収集している。一事例として、『万葉集』左注の「朱鳥年号」があり、これについては、「東海の古代」214号（平成30年6月）を参照されたい。なお、朱鳥以外にも表2のとおり1年のズレの存在が判明している。

表2 『万葉集』（左注）・『日本書紀』（天智紀）記事の期日比較表

| 歌番 | 『万葉集』記事                                                | 『日本書紀』天智紀記事                                           |
|----|--------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------|
| 18 | 日本書紀曰<br>六年丙寅春三月辛酉朔癸卯<br>遷都于近江                         | (天智六年丁卯)<br>三月辛酉朔己卯<br>遷都于近江                          |
| 21 | 紀曰<br>天皇七年丁卯夏五月五日<br>天皇 縦獵於蒲生野<br>于時 大皇弟・諸王・内臣及群臣 皆悉従焉 | (天智七年戊辰)<br>五月五日<br>天皇 縦獵於蒲生野<br>于時 大皇弟・諸王・内臣及群臣 皆悉従焉 |

### 書籍の紹介



#### なかった別冊②

#### 「日出処の天子」は誰か

著者：大下隆司、山浦純

頁数：224頁

価格：1800円（税別）

発行：ミネルヴァ書房

### ■『法隆寺伽藍縁起並流記資材帳』における古代逸年号

瀬戸市 林 伸禧

見出しの資材帳に記される大化年号を精査すると近畿王朝と九州王朝の年号に一年のズレがあると考えられる。

### ■改元・建元（2）

豊山町 磯田和則

国史大系版『日本書紀』の朱鳥元年の記事に「天皇太子。大津皇子。高市皇子。各加封四百戸」とある。この記事は何を意味するか疑問を投げかけた。

### 前回の例会の内容

#### ■日向三代の時代を俯瞰する

一宮市 畑田寿一

ニニギ命からウガヤフキアエズ命までの日向三代は3世紀前半に北部九州に実在したと考えられる。

#### ■卑彌呼の家 その4

名古屋市 石田泉城

ニニギを祀る天降神社は糸島に集中しており、またニニギの名の頭に付される「天邇岐志国邇岐志」（古事記）や「天饒石国饒石」は糸島の地名でありニニギの上陸は糸島と考えられる。これは天孫降臨地が糸島のクシフル山とする古田武彦説を裏付ける。

### 例会の予定

#### ■ 例会の予定

- 1 日時 9月9日(日) 13:30～17:00
- 2 場所 名古屋市市政資料館 第1集会室  
名古屋市東区白壁1-3、TEL052-953-0051
- 3 参加料 500円（会員は不要）

#### ■ 来月以降の例会 10月14日(日)13:30～

古田武彦先生とその学問に興味のある方ならどなたの参加も歓迎します。また参加に際し事前連絡不要、遅刻・早退もかまいません。例会で発表する場合には資料を25部用意ください。

#### ■ 投稿締切り日 9月28日(火)厳守

#### ■ 投稿先（編集担当：石田）

furutashigaku\_tokai@yahoo.co.jp

